

第124回歴博フォーラム

園芸の文化と科学



8



3



6



1



10



5



2



7

2026年

7月4日(土) 13:00~16:20

会場 国立歴史民俗博物館 講堂



4

9

開催にあたって

くらしの植物苑は、1995年9月14日に開苑し、本年度30周年を迎えました。このフォーラムは、当苑の開苑30周年記念事業の一環として開催するものです。

当苑は、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し、人と植物のかかわりについて示すことを目的としています。園芸も欠かせない視点の一つです。1999年に開催した特別企画「伝統の朝顔」を嚆矢とし、2001年には特別企画「冬の華・サザンカ」を加え、2002年からは特別企画「季節の伝統植物」と銘打ち、春は「伝統の桜草」、夏は「伝統の朝顔」、秋は「伝統の古典菊」、冬は「冬の華・サザンカ」と、年4回の古典園芸植物の展示を開催してきました。

古典園芸植物とは、江戸時代に日本で育種・栽培され、特異な発展を遂げた鑑賞植物や、近代に普及した鑑賞植物の中でも、江戸時代と同様の価値基準で愛好されたものをいいます。当苑の特別企画「季節の伝統植物」は、上記4種の古典園芸植物を、文化資源および遺伝資源として保存公開するものです。文理融合型の活動を行っており、植物園としては異彩を放つ存在といえましょう。

そうした当苑の特性を伝えるべく、園芸植物をとりあげ、人文科学と自然科学の二つの角度から迫る本フォーラムを企画しました。人文科学からのアプローチでは、文字資料やモノ資料をもとに、園芸の発達や普及・伝播などについて考察します。自然科学からのアプローチでは、ゲノム解析などをもとに、園芸品種の分化や多様化などについて考察します。

文理融合型の本フォーラムを通じて、くらしの植物苑の活動について、より一層のご理解が深まりますれば幸いです。

なお、当苑の整備に尽力された東京大学名誉教授(元本館教授)の辻誠一郎氏が3月に逝去されました。氏の学恩に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

国立歴史民俗博物館

第124回歴博フォーラム

園芸の文化と科学

日時／2026年7月4日(土) 13:00～16:20

会場／国立歴史民俗博物館 講堂

プログラム

- 13:00～13:05 開会挨拶 西谷 大 (国立歴史民俗博物館・館長)
- 13:05～13:10 趣旨説明 澤田 和人(国立歴史民俗博物館・研究部・准教授)
- 13:10～13:40 報告1「サクラソウの花色とそれに関わる遺伝子」
水田 大輝(日本大学・生物資源科学部・専任講師)
- 13:40～14:10 報告2「アジサイ人気の舞台裏—花の形を操る遺伝子から見た世界」
奈島 賢児(日本大学・生物資源科学部・准教授)
- 14:10～14:25 休憩
- 14:25～14:55 報告3「変化朝顔の作り手 旗本鍋島直孝」
岩淵 令治(学習院大学・国際文化交流学部・教授)
- 14:55～15:25 報告4「鉢植をめぐる文化史—菊と朝顔」
平野 恵 (台東区立中央図書館・郷土・資料調査室専門員)
- 15:25～15:55 報告5「西洋草花の普及—図譜と工芸意匠」
澤田 和人
- 15:55～16:05 休憩
- 16:05～16:20 総合討論・閉会の辞

総合司会：川村 清志(国立歴史民俗博物館・研究部・教授)

表紙

①サクラソウ(南京小桜) ②アジサイ ③アサガオ(青斑入握爪龍葉淡藤蟹色風鈴獅子咲牡丹) ④キク(希望丸) ⑤サフラン ⑥東京名所三十六花撰 戸田原桜草 国立国会図書館蔵 ⑦紫陽花模様小袖裂 本館蔵 ⑧三都一朝 本館蔵 ⑨江戸八景 袖ヶ崎春之夕照 個人蔵 ⑩西洋草花模様振袖 個人蔵

報告者紹介(報告順)

みずた だい き
水田 大輝

日本大学 生物資源科学部 アグリサイエンス学科 専任講師

【専門分野】 花卉園芸学

【代表的な業績】

- ・ D. Mizuta, M. Ito, A. Nakatsuka, N. Kobayashi, S. Kubota. "Sequence comparison with the upstream region of F3'5'H gene related to pigment synthesis in wild evergreen azaleas." *Acta Horticulture*, Issue 1434, 2025.
- ・ D. Mizuta, A. Nakatsuka, T. Ban, I. Miyajima and N. Kobayashi. "Pigment Composition Patterns and Expression of Anthocyanin Biosynthesis Genes in *Rhododendron kiusianum*, *R. kaempferi* and their Natural Hybrids on Kirishima Mountain Mass, Japan." *Journal of the Japanese Society for Horticultural Science*, Vol. 83, Issue 2, 2014.
- ・ D. Mizuta, A. Nakatsuka, I. Miyajima, T. Ban, and N. Kobayashi. "Pigment composition patterns and expression analysis of flavonoid biosynthesis genes in the petals of evergreen azalea 'Oomurasaki' and its red flower sport." *Plant Breeding*, Vol. 129, Issue 5, 2010.

な し ま けん じ
奈島 賢児

日本大学 生物資源科学部 バイオサイエンス学科 准教授

【専門分野】 園芸科学

【代表的な業績】

- ・ K. Nashima et al. "INDELs linked to mophead-lacecap phenotype controlling gene TEMARY in *Hydrangea macrophylla*." *Acta Horticulturae*, Issue 1434, 2025.
- ・ K. Nashima et al. "The SEP homologous gene TEMARY regulates inflorescence phenotypes in *H. macrophylla*." *Horticulture Research*, Vol. 12, Issue 3, 2025.
- ・ K. Nashima et al. "Genome sequence of *Hydrangea macrophylla* and its application in analysis of the double flower phenotype." *DNA Research*, Vol. 28, Issue 1, 2021.

いわぶち れい じ
岩淵 令治

学習院大学 国際文化交流学部 教授

【専門分野】 日本近世都市史

【代表的な業績】

- ・ 岩淵令治・志村洋編『日本近世史を見通す』第4巻「地域からみる近世社会」吉川弘文館、2023年
- ・ 岩淵令治編『史跡で読む日本の歴史』第9巻「江戸の都市と文化」吉川弘文館、2010年
- ・ 岩淵令治『江戸武家地の研究』塙書房、2004年

ひらの けい
平野 恵

台東区立中央図書館 郷土・資料調査室専門員

【専門分野】 園芸文化史・本草学史

【代表的な業績】

- ・ 平野恵『園芸の達人 本草学者・岩崎灌園』(ブックレット「書物をひらく」8)平凡社、2017年
- ・ 平野恵『温室』(ものと人間の文化史152)法政大学出版局、2010年
- ・ 平野恵『十九世紀日本の園芸文化―江戸と東京、植木屋の周辺』思文閣出版、2006年

さわだ かず と
澤田 和人

国立歴史民俗博物館 研究部 准教授

【専門分野】 日本染織史・服飾史

【代表的な業績】

- ・ 澤田和人『野村正治郎とジャポニズムの時代―世界に着物を広げた人物』国立歴史民俗博物館、2025年
- ・ 澤田和人「ジャポニズムと藤」『国立歴史民俗博物館研究報告』第251集、2025年
- ・ 澤田和人『野村コレクション 服飾品Ⅱ』(国立歴史民俗博物館資料図録10)国立歴史民俗博物館、2014年

サクラソウの花色とそれに関わる遺伝子

日本大学・生物資源科学部 水田 大輝

四国と沖縄を除く北海道から九州まで日本全国に幅広く自生しているサクラソウ (*Primula sieboldii* E. Morren) は、春先に淡紅色の可憐な花を咲かせる多年生植物である。江戸時代には様々な園芸品種が作出された古典園芸植物の一つでもあり、現在では花の形だけではなく花の色や模様が多様化した園芸品種が数多く存在している。本報告では、サクラソウの花色多様化の歴史、サクラソウの花色と色素、そして色素合成に関わる遺伝子との関係について紹介する。

竹岡(2016)によると、サクラソウ栽培の最古の記録は室町中期で、尋尊大僧正の日記『大乘院寺社雑事記』の文明10年(1478)3月の日記末尾には、「庭前ノ木草花」の箇所「二月 花櫻 信乃櫻 岩柳(ユキヤナギ) 庭櫻 櫻草」と書かれており、大乘院(1087年に創建された興福寺の門跡寺院)の庭園にサクラソウが植えられていた。また、公家である山科言国の日記『言国卿記』で明応2年(1493)4月3日に、後土御門天皇がサクラソウを所望されていたので自邸(山科言国)の庭のサクラソウ3本を直ちに持参すると天皇はお庭にこれらを植えさせていらっしゃったとの記述や、山科家に仕えていた大澤久守の日記『山科家禮記』には、延徳3年(1491)2月21日に室町幕府第10代将軍である足利義材(義植)がサクラソウとクリンソウを所望されていたのでこれを進上した旨の記録が残っている。これらの記録に残るサクラソウは、野山から採ってきた個体を庭で育てていたもので、花の特徴が何も記載されていないことから、淡紅色の野生のサクラソウであったと考えられる。淡紅色のサクラソウ以外の最初の記録は、安土桃山～江戸初期の頃で、狩野光信(永禄8年(1565)～慶長13年(1608))の作とされる「四季花鳥図」の屏風にはタンポポの隣に白花のサクラソウが描かれている。江戸中期になるとサクラソウの園芸品種化が始まり、様々な色や模様のサクラソウが登場する。例えば、江戸・染井の植木屋・伊藤伊兵衛政武が享保18年(1733)に刊行した『地錦抄附録』では、「濃紫櫻草」(桜草の内に色すぐれてこいむらさき二月咲)、「藤裏桜草」(花のおもて桜色にてうら藤色也うらの色おもてへうつり羽二重に紅裏の景気なり二月咲)、「咲分桜草」(惣地むらさきにとび入り白く有、さきわけさらさのごとく二月咲)、「南京小桜」(花形極て小りん、花形少しそりかへり、じんじやうに花の内白く、まはり紫にそこ白ともいふべし、かはりたる物也二月咲)、「東小桜」(さくらさうの極小りんにて花形しほらしく色ほんのりと桜色なり)など図付きで紹介されている(図1)。江戸の後期になると、さらに園芸品種化が進んだ。一例として、『桜草作伝法』(著者不明、作成年代不明)では、「星の井」(底るり)、「蛇目傘」(底紅)、「高砂子染」(紋り)、「隠し裏」(裏紅)、「芙蓉峰」(白)、「旭の袂」(薄染)、「する墨」(るり)、「児源氏」(うすいろ)など、文化年間(1804～18年)までに作出・栽培されていた計65品種が紹介されている。このように、江戸時代には、花色、模様が多岐に亘る品種が既に数多く作出されていた。

それでは、現在、我々が普段見ているサクラソウの花の色はどのように色分けできるのだろうか。花の色を特定する時、基準となる英国王立園芸協会カラーチャート(RHSCC: Royal Horticultural Society Colour Chart)を用いて、江戸時代に作出された品種を含む50以上の様々なサクラソウの花色を評価した。その結果、花の色は、Red-purple、Purple、Purple-violetおよびWhiteの4つのグループに分類された。橋本(2013)の先行研究より、サクラソウ花卉に含まれる色素はフラボノイドで、ペチュニン配糖体1成分、マルビジン配糖体1成分、ケンフェロール配糖体2成分、カフェ酸配糖体1成分の主に5種類が単離同定されていることから、高速液体クロマトグラフィー(HPLC: High Performance Liquid Chromatography)を用いて、これらの色素の定性、定量を行った。その結果、白花はアントシアニン色素を含んでいないこと、有色花では3つのグループ間と色素構成に明確な違いが

見られなかった。一方で、色素含量の多少が花色の濃淡に影響していることが確認された。なお、白花を除くグループ間で花卉pHの平均値に違いがあり、花色に青味が増すグループほど平均のpHが高くなる傾向が見られた。

これまで述べてきたサクラソウに含まれる主要色素は、フラボノイド合成経路を経て作られており、植物が生きていくのに必要不可欠な一次代謝産物に色素合成に関わる複数の酵素が順次触媒して、二次代謝産物であるフラボノイド色素が合成される。サクラソウのアントシアニンを作る酵素の遺伝子はどのような動きをしているか、合成経路の酵素を作る遺伝子の発現傾向(働き方)を有色花(‘南京小桜’)と白色花(‘宇宙’)を用いて調査した。フラボノイド合成経路上流の遺伝子(*CHS*、*F3H*など)は、花冠が着色する発達初期に発現量が多く、下流の遺伝子(*F3'5'H*、*ANS*など)は、花冠発達後期の開花時に発現量が増加する傾向がみられた。また、白色花では全ての花冠発達ステージで下流の遺伝子の発現量が少なくなっていた。このことから、サクラソウの有色花と白色花は、フラボノイド合成経路の途中までは双方で遺伝子が働き、薄黄色～無色のフラボノール色素をそれぞれ作っているけれども、合成経路の下流の遺伝子は白色花のみ働かないため有色のアントシアニン色素が作られていないと考えられた。

現在、白色花で合成経路下流の遺伝子が働かない原因の調査や、絞り咲きや覆輪など模様の発生メカニズムを明らかにするため研究を進めている。

〈引用文献〉

- ・橋本奈々(2013)サクラソウ花卉色素の多様性解析. 筑波大学大学院生命環境科学研究科生物資源科学専攻 修士(農学)学位論文
- ・竹岡泰通(2016)『桜草栽培の歴史(第二版)』, 創英社／三省堂書店. 東京



‘濃紫桜草’



‘藤裏桜草’



‘咲分桜草’



‘南京小桜’



‘東小桜’

図1 『地錦抄附録』に記載されている各園芸品種 国立国会図書館蔵

アジサイ人気の舞台裏

—花の形を操る遺伝子から見た世界

日本大学・生物資源科学部 奈島 賢児

日本原産の落葉低木であるアジサイ (*Hydrangea macrophylla*) は、現代の園芸市場において高い評価を得ている鑑賞用植物のひとつである。梅雨時の観光資源としてのみならず、母の日の贈答用鉢花としても高い需要があるが、その多様な花型がいかにして形成され、歴史の中でどのように選抜されてきたのかについては、長らく謎に包まれていた。本報告では、古典文献からの情報と、最新のゲノム解析技術によって明らかになった変異遺伝子の解析結果を交え、近代のアジサイがどのような歴史を辿ったのか、論じたい。

歴史的視点に立つと、アジサイに対する日本人の評価は時代によって大きく変遷してきた。『万葉集』においては、橘諸兄および大伴家持によって詠まれているものの、アジサイの評価は必ずしも高くはなかった。当時のアジサイは、野生本来の姿である「がく咲き(装飾花が花序の周辺部のみに配置される形態)」であり、その花色が移ろう様は「変節」や「不誠実」の象徴として捉えられる向きもあったためである。しかし、江戸時代に至ると園芸文化が飛躍的に発展し、花序の全域が装飾花へと転換した「手まり咲き」個体が注目を集めるようになる。当時の絵画や図譜には、豪華な手まり咲きアジサイが数多く記録されており、この時期に現代に続く観賞価値の基礎が確立されたことが示唆される。

当研究グループでは、手まり咲き、がく咲きになるかどうかを決定する遺伝子をゲノムDNA中から探し出し、これを「*Temary*(テマリー)」と名付けた(Nashima et al. 2024)。*Temary*の遺伝子の機能が欠損している個体は手まり咲きに、機能している個体はがく咲きになるというものである。*Temary*の機能を欠損しているタイプのゲノムは3種類が見つかっており、それぞれ関東から東北の異なる地域において発生した可能性が報告されている(上町ら、2024)。特に注目すべきは、現在の人気品種の源流となった個体が、これら物理的に隔離された地域の変異を併せ持つ「交配個体」であった点である。これは、野生の手まり咲き個体を収集して楽しんでいただけのみならず、江戸時代の園芸家たちが、収集ネットワークを駆使し、異なる地域のアジサイを江戸に集め、価値の高いアジサイの品種改良を行っていたことを裏付けるものである。これら日本で作成された手まり咲き品種は、1820年代にシーボルトらによって欧州へ導入され、後に世界中で愛される「セイヨウアジサイ」品種群成立の遺伝的基盤となったのである。

さらに、現代のアジサイ人気を牽引するもう一つの重要な要素が「八重咲き性」である。かつての一重咲き(がく片4枚)に対し、「万華鏡」や「銀河」に代表される現代のヒット品種は、多重に重なる装飾花を特徴とする。この八重咲き形質のメカニズムを解析した結果、花の器官形成を制御する「ABCモデル」の司令塔的役割を担う遺伝子群(*LEAFY*および*UFO*)の機能欠損が関与していることが明らかとなった(Nashima et al. 2020)。本来であれば雄しべや雌しべを形成すべき組織が、遺伝子の変異によって「花弁状のがく片」へと分化の方向を転換することで、重層的な美しさが生み出されている。これらの八重咲き遺伝子の多くは、1970年代から80年代にかけて、伊豆の城ヶ崎海岸や横浜の民家の庭先などで偶然発見された突然変異個体(「城ヶ崎」や「隅田の花火」など)に由来する。野生の中に埋もれていた希少な個体を見出すという、地道ながらも重要な審美眼と尽力が、数十年の時を経て現代の華麗な園芸品種群へと結実したのである。

アジサイの多様な造形美は、自然界が生み出した偶然の産物である変異を、人間の知性と情熱が数

百年という時間をかけて拾い上げ、編み込んできた結果に他ならない。本報告を通じて、アジサイという植物の背後に流れる、遺伝子のミクロなドラマと、日本人が築き上げてきた園芸文化の壮大な系譜を再考する機会としたい。

〈引用文献〉

- Nashima et al. (2024) The *SEP* homologous gene *TEMARY* regulates inflorescence phenotypes in *H. macrophylla*. Horticulture Research.
- Nashima et al. (2020) Genome sequence of *Hydrangea macrophylla* and its application in analysis of the double flower phenotype. DNA Research.
- 上町達也ら(2024)花序表現型の制御遺伝子*Temary*に基づくアジサイの品種分化過程の推定. 園芸学研究. 第23巻別1.

変化朝顔の作り手 旗本鍋島直孝

学習院大学・国際文化交流学部 岩淵 令治

はじめに— 変化朝顔第二次ブームにおける杏葉館

江戸時代後期におけるペットや園芸品種ほかさまざまな趣味における奇品の流行を背景に、突然変異を楽しむ変化朝顔の育成は、第一次(文化・文政期)、第二次(嘉永・安政期)の2回のブームがあった。前者では、三都における文人が作り手の中心であったが、後者では植木屋が中心となり、作り手も地方の町場に広がりを見せた。また、品種自体も、正木から変異の激しい出物が好まれるようになった。こうした第二次ブームの担い手として植木屋の成田屋留次郎とともに注目されたのが、杏葉館という雅号で朝顔の図譜・番付に最多の登場をみせた旗本鍋島直孝(文化6年(1809)―万延元年(1860)7月)である。本報告では、この鍋島直孝に注目し、朝顔にとどまらない多様な活動を素描してみたい。

1 旗本鍋島直孝

直孝は、佐賀藩九代藩主鍋島齊直の二男で、十代藩主直正(閑叟)の兄にあたる。佐賀で出生後、文政2年(1819)に佐賀藩の分家である餅木鍋島家の養子となり、文政8年7月に家督を継いだ。同家は5000石の大身の旗本で、当時の知行地は遠江・三河にあった。直孝は、寄合から天保3年(1832)12月に火事場見廻、同13年7月より小普請組支配、翌年10月より嘉永元年(1848)11月まで北町奉行をつとめた後、大番頭を命じられ、同2年12月に「病免とな」り(続実紀)、その後死去するまでの12年間は役職に就くことなく寄合として過ごした。

2 園芸一菊、撫子、朝顔

直孝の園芸関係の活動としては、第二次ブームの変化朝顔のほか、撫子(瞿麦)の育成が知られる(平野恵『十九世紀日本の園芸文化』思文閣出版、2006年)。「撫子培養手引草」によれば、天保9年(1838)4月に「瞿麦連中」と集まって品評会を開き、同年5月の瀑布亭の会と合わせ、その品種は300種以上に及んだという。また、太田南畝門下の「五車亭亀山」を中心とした狂歌連によると推測される「瞿麦草譜」には、20種の撫子が描かれ、うち11種が直孝の作品であった。

このほか、直孝は四谷・牛込界隈の中菊の品評会の番付にも、文政4年(1821)よりたびたび登場し、選者をつとめることもあった(「中菊花位附」)。文化14年(1817)の品評会の番付など変化朝顔の第一次ブームの番付に登場する「モチノ木」は、直孝である可能性もあるだろう。このように、直孝の園芸品種の育成は、変化朝顔の第二次ブームにとどまらなかったのである。

3 文化的活動とその背景

さらに、直孝の文化的活動は園芸に終わらなかった(岩淵「近世後期の園芸文化」『伝統の朝顔』Ⅲ、国立歴史民俗博物館、2000年)。嘉永4年(1851)春には、庭を臨む二階の書斎と茶室「梁夢閣」、二階から庭を通して建物(「養艶堆」)に通ずる渡り廊下「花雲棧」と小径を設けており、施設の額の揮毫や庭の草木の命名では、叔父にあたる元蓮池藩主で蘭学や文雅に通じた鍋島直与、佐賀藩主夫人の筆姫をはじめ、遠州流の茶人小堀宗中・宗本親子、公家の徳大寺公純^{きんいと}、開国和親を唱えた元新発田藩主溝口直諒など、文芸に通じた者との接点がうかがえる。さらに自身も、主に江戸の珍話・奇事・怪談を百話集めた随筆「近世百物語」を嘉永5年に成稿したが、その情報は北町奉行在職中に得たもののほ

か、自身が組織した「楽の連」、すなわちサロンで情報を入手していた。「近世百物語」には、屋敷に寓居もしくは出入した者として、清水古松齋(もと飯田町 漢詩 儒古学)、岡田鶴川(幕府御家人 絵師 奇石蒐集)、古くは杉田玄白の名も記されている。そして、嘉永6年(1853)からは、馬琴の兎園会などにも参加した随筆家・国学者の山崎美成(1796-1856)を家臣としてかかえ、連夜の雑談を「夜談録」にまとめさせた。

実は、直孝の「病免」は、更迭、禁足だったようである。自身の著作(「泰平暦稿」 後述)では、処罰(「御咎」)として病気を理由に大番頭を退役するよう、老中より同役を通じて指示を受けたとし(「病氣之旨を以寛々不^{ゆるゆる}差急^{さしいそかず}退役願可差出^{さしだすべし}」)、その理由として天保13年(1842)7月から嘉永2年(1849)10月までの8年間で21通の「諫奏」を提出したことをあげている。「近世百物語」の序文では、自身を「住僧庭仙」と称し、「親戚・故旧の面会」を厳しく禁じられるという異例の内々の処罰(「異例の御内咎」)を受けながら、作品を「望樹山」の「無茶垢茶寺」で執筆したとしている。「望樹」は「望城」とともに「望之樹」のように直孝が蔵書印等で用いる号であり、屋敷の地名もちのき(籾の木 餅木)に因んだものと思われるが、「無茶垢茶」は自身の状況を卑下したものであろう。「庭仙」も、さしずめ庭で浮世を離れて暮らす仙人といったところであろうか。こうした状況が彼の文化的活動を活発化させた可能性があるだろう。

おわりに―家政改革と家の存続

こうした晩年を過ごした直孝であったが、また同時に家康から家重までの各将軍の一代記「泰平御実記」3巻(嘉永5年(1852))、歴史年表である「泰平暦稿」2巻(嘉永6年)も執筆している。「泰平暦稿」は発禁書となった幕臣作成の『泰平年表』を紛失してしまったことをきっかけに作成されたが、下巻以降は天保8年(1837)の大塩平八郎の乱から天保改革後までの諸政策が記されている。作成にあたっては、『本朝武林傳』『落穂集』『徳川軍功記』『多門院日記略』などの蔵書も利用されたと考えられる。このほか、「家政賞罰」(嘉永2～安政3年(1856))、安政大地震で倒壊した国元の陣屋の場所替えを契機とした家臣と村役人の処罰の経緯を綴った「至徳録」3巻(安政2～3年)は、ともに家政改革の記録といえる。すでに安永7年(1778)12月に江戸屋敷勝手向賄が差し支えたとして、遠州の知行所村々より翌年の年貢を引き当てとして100石につき2両ずつを月15%の利息で借り入れているように(『磐田市史』史料編2)、多くの旗本と同様、餅木鍋島家の財政も悪化していたと思われる。直孝は写本した「続泰平年表」を「子孫の明鏡」としているように、歴史書を収集・編纂し、後代に遺すとともに、家政改革をより推進し、家の存続を図ったのではなかろうか。今後、直孝の処罰と政治的な思想や立場について分析をすすめ、直孝が同時に行っていた上級旗本・大名分家としての活動と文化的活動の関係についてさらに検討を深めていきたい。

鉢植をめぐる文化史—菊と朝顔

台東区立中央図書館 平野 恵

本報告では、植物を扱う品評会における展示方法という視点から、菊と朝顔にフォーカスし、植物の飾り方の変遷を呈示する。併せて本草学の視点から切枝と鉢植の違いについて考察を加える。

正徳5年(1715)刊『花壇養菊集』上巻(図1)の菊花の品評会図によると、観覧者は座敷に上がり、極めて簡素なデザインの竹筒の花瓶に活けられた切花である菊を見学している。展示品は、座敷内の布を敷いた机の上に配され、採光は庭から射し込む太陽光である。この構図は、天保期の尾張医学館薬品会における鉢植の展示法に通じ、採光・観覧場所の確保等、既にあった菊の品評会の形式に倣った点が容易に想像できる。

菊を活けた竹筒は寸法まで詳細に品評会用に定められていた簡素なものである(図2)。品評会という性質上花器の規格の統一は、花器の美醜によって花の品位が左右されないための措置である。

京の本草学者・水野^{こうざん}皓山の『皓山日記』には、定期的な本草研究会における^{さくよう}腊葉(押し葉)による鑑定の様子が記録される。天保2年(1831)5月19日、華道家元池坊からの鑑定依頼に対して皓山は、腊葉を改めて送ってからでないと鑑定不能と伝える。池坊は葉を付けないまま鑑定を求め、折枝(切花)では、生け花のように意図的に葉を切り落とした場合でなくても、植物の状態を表すに不充分であり、輸送によって葉を失うリスクが高いことが判明する。

菊の観賞では、丁子咲、狂咲、抱咲など花の咲き方には詳しい説明が付されるが、葉に関してはほとんど記述がなく重要と見なされなかった。しかし、葉の状態の評価を加味した場合、腊葉、さらに鉢植が鑑定基準の上位に位置し始める。

変化朝顔は、花だけでなく葉の状態も含めて観賞するため、鉢植による品評会が必須であった。品評会は、寺社境内で開催され室内展示は考えられていなかったが、尾張の本草学者・水谷^{ほうぶん}豊文が床の間に鉢植を飾ることを推奨し、曲亭馬琴著『南総里見八犬伝』挿絵では、洋犬を飼い、虫籠を吊るし、変化朝顔を床の間に飾っていた(図3)。これは、土が付いたものを室内に持ち込むのは禁忌であるにもかかわらず、染付の豪華な松の鉢植が飾られる「江戸八景 袖ヶ崎春之夕照」(図4)と共通点があり、ともに富や趣味を表現する小道具に鉢植や洋犬が用いられていた。また、描かれた場が「遊廓」である例は、他にも見られ、幕末期の特徴としてとらえることができる。

本報告は、拙稿「近世後期薬品会・品評会における植物の展示方法と園芸植物の飾り方」(『生活文化史』80号、2026)をもとに再構築したものである。



図1 『花壇養菊集』 国立国会図書館蔵

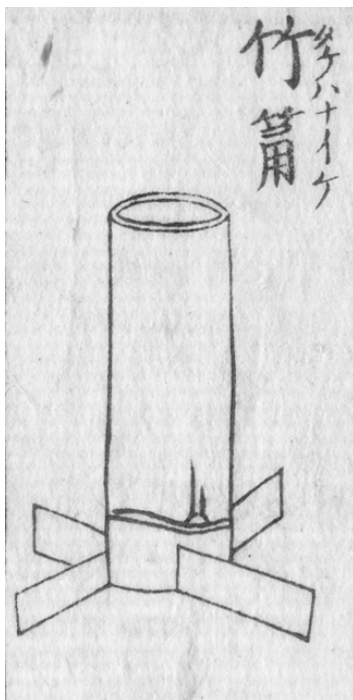


図2 『菊経』 筆者蔵

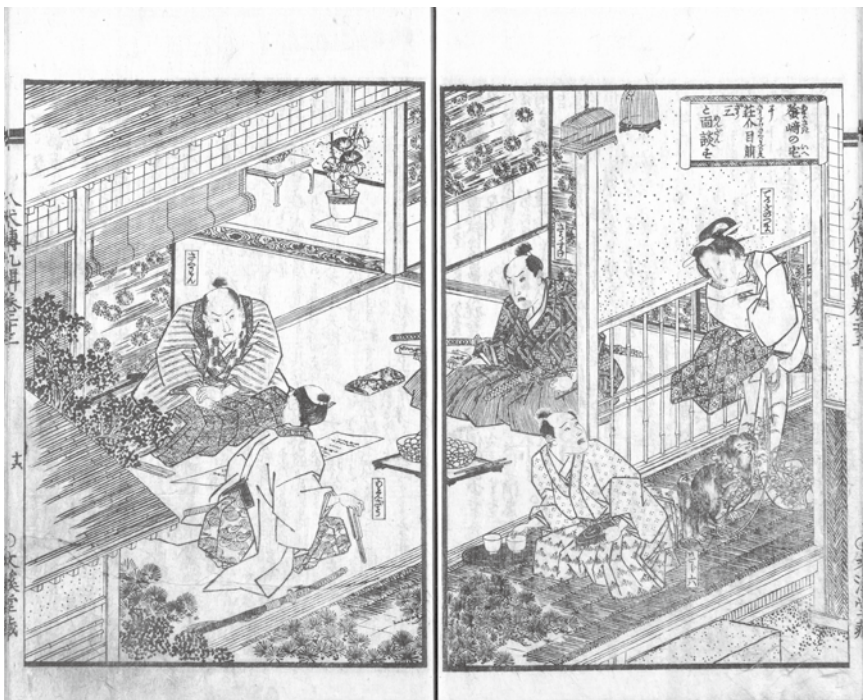


図3 『南総里見八犬伝』 国立国会図書館蔵



図4 元治元年(1864)5月制作
歌川国綱「江戸八景 袖ヶ崎春之夕照」 個人蔵



図5 「江戸八景 袖ヶ崎春之夕照」(部分)

西洋草花の普及—図譜と工芸意匠

国立歴史民俗博物館・研究部 澤田 和人

「西洋草花」は、明治時代に用いられ始めた言葉である。西洋諸国から日本に入ってきた^{かき}花卉園芸植物を指すが、その範疇には曖昧なところがある。維新後に舶来した植物はもとより、それよりも前に伝来し、すでに栽培が広まっていた植物の中にも、西洋草花と呼ばれるものもあった。新たな舶来品を主軸に、江戸時代以前の伝来であっても、明治時代以降に一般化したものや、西洋由来というイメージを色濃く残しているものも含めて、西洋草花と認識されていた。本報告では、そうした西洋草花について、近代における普及の過程をたどるとともに、それが日本の文化の中にいかに発露したのか、図譜や工芸意匠を通して見ていきたい。

明治時代に入ると、農業の西洋化や西洋人の居留などにより、官民の両方の経路から数多くの西洋草花が日本にもたらされた。その中でも最初に注目を浴びたのはバラであり、早くも明治8年(1875)頃には流行を迎えている。ただし、純粋に愛好のみが流行を支えていたわけではなく、多分に投機

の目的もあった。日本でのバラの流行は、18世紀終わり頃から始まる西洋におけるバラの育種の盛況振りと関係しており、西洋での流行が日本にも及んだと捉えることができる。このことは、洋蘭についても同様であった。ほぼ同じ時代、西洋人が、ある意味、バラ以上に熱狂したのが洋蘭であった。オーキッド・ハンターたちが中南米や東南アジアなどで採取した洋蘭は、富裕層の間で高額で取引された。日本でも温室を構えた富裕層が洋蘭の栽培を行っており、大隈重信(1838-1922)はその一人としてよく知られている。

バラも洋蘭も、憧れのまさに高嶺の花であり、世間一般に普及した西洋草花とは言い難い。明治20年代になると、神戸の富山柴人(生没年不詳)や横浜の横浜植木など、日本人が経営する植物貿易商が台頭した。西洋草花の供給基盤が整備されたが、実際の普及は明治30年代の後期をまつこととなる。

普及に大きく与した一つの要因は、「学校園」であったと考えられる。西洋諸国の教育方法に関する調査をもとにした園芸教育者の針塚長太郎(1872-1949)らの提言により、文部省は小学校に^{そさい}蔬菜・果樹・花卉・花木などを栽培する学校園の設置を奨励した。当時は教授の内容や理論の全国的な統一化が行われていたが、西洋での教育方法が大いに参考にされており、学校園の導入もその一端である。学校園は急速に設置されていき、栽培が推奨された花卉には、在来の草花以上に多くの種類の西洋草花が含まれていた。

もう一つの大きな要因として、「家庭園芸」の提唱も見逃せない。東京帝国大学農科大学の助手であった永井靖吉(生没年不詳)の『家庭園芸談』(吉川弘文館、1903年)を筆頭に、家庭での園芸、すなわち家庭園芸を推奨する言説が盛んに展開した。家庭園芸もまた、西洋の動向と関係している。西洋では19世紀後半、それまで富裕層の特権であった園芸は、大衆に開かれるようになる。アマチュア向けに栽培技術を教える園芸書が刊行され、そこで説かれる家庭で園芸をする利点は、日本の家庭園芸についての言説にみるものと多分に共通している。西洋に端を発しているため、家庭園芸で栽培が薦められた花卉は、西洋草花が主体であった。

学校園と家庭園芸により、いよいよ普及が始まった西洋草花の中でも、先導を果たす役割を果たしたのが、ダリアとコスモスである。ダリアの栽培は、熱狂的とも言える流行現象を生み出した。バラや洋蘭よりも手軽に栽培を始めることができるうえ、花形と花色の変化に富むことが収集癖を刺激し

て、人気を集めたのであろう。一方のコスモスは、栽培が一層容易であった。日本人の嗜好にも適っていたため、人知れず急速に広まった。西洋草花は、ダリアとコスモスを窓口として身近になっていき、明治時代の最末期ともなると、在来の園芸植物に打撃を与えることもあるほど栽培が盛んとなる。

さて、工芸意匠に目を向けると、伝統的な植物モチーフに混じって、西洋草花としてバラのみがあらわされている例が少なからず見られる。バラが西洋草花の中で、いちはやく知られるようになったことを映し出していよう。

明治36年(1903)11月、三越呉服店は「早稲田の薫」と銘打つ新製品を売り出した。それは、大隈重信が栽培していた洋蘭を、友禅染できわめて写実的に染めあらわしたものであった。華麗な洋蘭の意匠は評判を呼び、大いに人気を博した。同年の3月から7月にかけて開催された第5回内国勸業博覧会に、大隈は洋蘭を参考出品しており、それが「早稲田の薫」を制作する契機となっていよう。なお、大隈がこの博覧会に出品した洋蘭などは、酒井忠興(1879-1919)らの出品物とともに『珍花図譜』(山田芸艸堂、1903年)として図版化されている。

ダリアの栽培が熱を帯びると、ダリアの意匠を売りに出すなど、植物に対する注目度の高さとモチーフへの採択とは連動している。しかし、西洋草花に取材した意匠は、一過性の流行にとどまった。真に定着するのは、大正8年(1919)頃以降のこととなる。それに大きく貢献したのは、谷上広南(1879-1928)が描く『西洋草花図譜』(芸艸堂、1916~17年、図1)の公刊であったと考えられる。谷上は大阪の図案家であり、同図譜の刊行時は岡島友禅工場で図案の制作を任されていた。西洋草花を生き生きと描き出した同図譜は高く評価され、絵手本として活用された(図2)。

意匠において西洋草花モチーフが定着したことには、見過ごせない意義がある。それは、日本趣味と西洋趣味の間をつなぎ、表現の幅を拡張する大きな一歩になったと評価できるためである。



図1 谷上広南『西洋草花図譜』 国立国会図書館蔵



図2 『西洋草花図譜』を絵手本とした着物(部分) 個人蔵

第124回歴博フォーラム
園芸の文化と科学

発 行 日 2026年7月4日
編集・発行 国立歴史民俗博物館
所 在 地 〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117

ご案内

【催事のご案内】 ※聴講無料 場所：国立歴史民俗博物館 講堂

・第469回歴博講演会「市民とAIが協力して古文書を解読―「みんなで翻刻」の世界」

2026年7月11日(土) 13:00～15:00

講師：橋本 雄太(国立歴史民俗博物館・研究部・准教授)

・第470回歴博講演会「艦船のライフサイクル：歴史学・文化人類学・人文情報学の交差点」

2026年8月8日(土) 13:00～15:00

講師：小風 尚樹(国立歴史民俗博物館・研究部・特任准教授)

・第471回歴博講演会「“地元ならではの”って何だろう―地域の個性を支える園芸作物―」

2026年9月12日(土) 13:00～15:00

講師：真柄 侑(国立歴史民俗博物館・研究部・特任助教)

・歴博映像フォーラム20「万博におけるアイヌ舞踊とその表象」

2026年10月24日(土) 13:00～16:30

講師：内田 順子(国立歴史民俗博物館・研究部民俗研究系・教授)

川上さやか(国立アイヌ民族博物館・教育普及室・研究員)他

・第472回歴博講演会「企画展示「アイヌ民族と博覧会 ―150年の経験―」を語る」

2026年11月14日(土) 13:00～15:00

講師：立石 信一(国立アイヌ民族博物館・教育普及室・室長補佐)

関口 由彦(国立アイヌ民族博物館・展示企画室・室長)

【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の企画展示・特集展示・フォーラム・講演会等の情報は、ウェブサイト・SNS・YouTube・ニュースレター(メルマガ)でもご案内しています。

- | | |
|--------------|---|
| ○ウェブサイト | https://www.rekihaku.ac.jp |
| ○X(旧Twitter) | @rekihaku |
| ○Instagram | rekihaku_nmjh |
| ○Facebook | https://www.facebook.com/NationalMuseumofJapaneseHistory/ |
| ○YouTube | https://www.youtube.com/@NMJH |
| ○ニュースレター | ウェブサイトのトップ画面右上にあるアイコンより「歴博とは」のページを開きます。下にスクロールして表示される登録画面よりメールアドレスを送信してください。 |



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-33-6



9784909293336